

が大きく異なるのである。定められた台本の内容を巧みな話芸によって人々に伝える伝統的な説教と、自らの思想や主張を人々に伝える演説では、弁舌の役割が根本的に異なっている。落語の源流ともされる「節談説教」を聞きに集まる聴衆は、説教者の思想や主張を理解することよりも、話芸を楽しむことを求めている。説教のなかに組み込まれた教訓や経典の一節が、人々の心に沁み入ることはあったであろうが、そこでは理論的な説明よりも情感が重視されている。

一方、自己の思想や主張を人々に伝えるメディアとしての演説・講演にとつては、内省的に自らを語ることが重要なのである。話芸によって人々を楽しませることは、副次的な目的になる。宗教的な講演・演説にとつては、自らの信仰を語り、教えの内実あるいは正当性を人々に納得させることが重要なのである。演説の目的は、人々の意識を変革する「教化」であつて、これが宗教的な教化活動として行われる場合には「布教」になる。

近世の「節談説教」の歴史的研究を中心に、日本の「話芸」の文化史を研究した、関山和夫は、「一人前の説教者になるためには、師匠の随行をするという修業の方法は、昭和十年代をもって終止符を打った」としている。この後は、各宗の大学で学問や教養を身につけた僧侶たちが、人々の教導を担うことになる。従来の近代仏教史では、あまり注目されてこなかった側面の一つであるが、自らの信仰を語り、人々を教導するための手法が、このように大きく変化したことは、「近代仏教（さらには「日本の近代」）とは何か」という問いにとつて、無視す

ることのできない意味を持っているのではないだろうか。

当時の仏教界を取り巻く、政治的・社会的・文化的状況と深く関わりながら、演説・講演というメディアを通して仏教思想について語り続けた、加藤咄堂の活動は、新たなメディアを通じて語り直された「仏教／宗教」の歴史性について考えるうえで、極めて興味深い題材を提供してくれるのである。

前田慧雲と「自由討究」

——本願寺教団の対応と宗学研究法——

岩田 真美

「自由討究」とは、宗教的伝統に対する「自由討究」という態度・方法であり、教権教条に束縛されず、自由に宗教の真理を発見することである。それは、明治二十年代から三十年代における仏教革新運動（新仏教運動）の中で主唱されたものであった。活字メディアの発達、教育環境の整備は、「自由討究」という実践を可能にする大きな要因でもあった。本発表では、真宗教学の近代化に大きな影響を与えたといわれる前田慧雲（一八五七—一九三〇）を取り上げ、前田における「自由討究」の主張と、活字メディアや学校教育との関わり、加えて、「自由討究」に対する（西本願寺）教団側の対応について検討する。

明治三十四年、本願寺派第二十六回定期集会において、「宗

パネル

義二関スル著書取締条例ノ建議」という建議案が提出された。これは、当時の教団内外における自由討究の風潮を危険視し、派内僧侶の出版物を原稿段階で本山に提出させて事前検閲し、宗義に違反する場合はその出版を許可しないという出版取締条例の施行の必要性を訴えたものであった。建議案の施行によって自由討究を取り締まろうとする教団の動向に対し、前田慧雲は『六条学報』第六号（明治三十四年十二月発行）に論文「宗学研究法に就て同窓会諸君に白す」を発表して、これを批判し、「自由討究」的態度・方法によつて、訓詁的・論題的解釈などの伝統的宗学研究法から、哲学的・歴史的・思想史的な研究法へ改めるべきことを主張した。そして、そのためには宗学以外の学問（普通学）を学ぶことが必要であると訴えた。

明治三十五年四月、本願寺派の学校として東京高輪に高輪仏教大学が開設されたが、前田慧雲は、同校の教員及び学長として、普通学を重視し、時代に適応する新教育を目指した。同校では教員と学生との交流を深めることを目的に「学友会」が組織され、この内、文芸部では雑誌の編集や出版、講演部では大内青巒・ダルマパーラ・内村鑑三・村上專精などの名士を招いて演説会を行っていた。高輪仏教大学は、本山に対して学校行政権の自主性を要求し、独自の新教育を展開していたが、それは次第に本山の批判を受けるようになり、明治三十六年十月、教学参議部議事会において普通学の全廃が検討され、その後、高輪仏教大学の廃止が取り決められた。学長の前田慧雲はじめ高輪系教員二十名は『教学私見』を発表して普通学的重要性を主張し、同校の廃止反対運動に乗り出した。前田慧雲らは東京

に真宗本派同志会を結成し、機関誌『教界時事』を発行、各地で演説会を行うなど、雑誌の出版や演説を通して教団の方針を批判し、改革を訴えた。教団側は、これらの行為が宗務施行妨害に当たるとして、前田慧雲以下、高輪系教員八名に奪度牒処分を下した。

前田慧雲は「自由討究」を宗学研究の基本態度とし、「広く世間の書も仏教各宗の書も読み、その中の栄養分を取つて、宗学の身体内へ送り込むことをせねばならぬ」と言い、普通学的重要性を主張した。このような理念から前田は、東京に開設された高輪仏教大学において、教員及び学長として、普通学を重視した新教育の導入に努めた。同校では「文章」「作文」に関する講義が行われており、当時『中央公論』の編集長であった櫻井義肇らがこれを教えていた。また、学生らが組織する学友会では、活発に出版・演説活動が行われていたことから、同校が出版・演説というメディアと積極的に関わろうとしていたことが分かる。このような環境は、宗教的伝統に対する「自由討究」的態度を養成し、時代に適応し得る「宗学」とは何かを考える場を、学生（青年仏教徒）たちに提供していた。それは次第に教団的権威「教権」との対立を生み出すこととなり、高輪仏教大学は閉鎖に追い込まれ、同校を守ろうとした前田慧雲らも奪度牒処分を受けることとなる。高輪仏教大学の閉鎖は、真宗教学が近代化へ向けて胎動し始める段階における大きな躓きであった。